◇談話会要旨◇

アイスランド10年の歩み

浅井辰郎

１９７３年１１月１７日の「発生論的手法によるアイスランド地誌」が全般的記述であったのに対して，これは翌年６月１５日からまる一週間，根本・竹内・西丸氏らと調査したうち，１９６４年以来１０年の歩みを目についたものから順に述べたものである。その第１は首都近くに１９６９年建設された長さ８００mもある巨大な工場ＩＳＡＬ（アイスランド・スイス・アルミ会社）で年６万tを産している。この電力は，東方１００kmに１９５７年に着工された２１万KWの能力をもつブールフェトル水力発電所からで，ここには日本の技術も導入されている。年産６万tは日本の１２０万tに比べれば１／２０にすぎないが，人口当りでは逆に４０倍に近い。工業の第２はミー湖畔の珪藻土工業で，１０年前には唯「湖底一面に厚さ数米の現生層があり，将来は資源化されよう」と云われていたものが，１９６５～６７年の間に工場ができ，豊富な高温蒸気を利用して水分を除き，重油キルンで焼いて純白の珪藻土に仕上げている。年産は３万tでヨーロッパが今までアメリカから輸入していた分を大巾に減少させたという。工業の第３は氷島第２の都市アークレイリに建設された日氷合弁のシシャモくん製缶詰工場で，産額は聞き洩したが，従業員５０人位，高度に自働化していた。ただくん製用にこの島でなけなしのカバの木を焚いているのが気になった。

次に驚いたのは貨幣価値の変動で１９６４年には１クローナが8.37円だったのに，７４年には２９４円と日本との関係では３倍も下っていた。もっとも実質価格はそれほどでもなく，この１０年の間にエハガキは３３円から４７円に，へちまほどもある大キウリが１４５円から２３５円に，厚いセーターが4,800円から5,800円になっていて，あるいは日本の貨幣価値の下落を示すものかも知れない。第５に目をひいたのは外人観光客がますますふえ，吾々の前後にもドイツ人団体１００人，日本人団体１６０人という噂があった。このためか本屋がふえて，前には半月かけてデンマークから取寄せた大縮尺の氷島図幅が，今では町の本屋ですぐ買えた。その中には５０浬の主張領海を太い赤線で示した，いかにもタラ戦争下の同島を象徴するような３００万分の一の地図もあった。第６に自動車が物凄くふえ，前にもみられたボルボに加えて，日本の６社の車が縦横に走っていた。私どもが１週間利用した氷島人運転手つきのマイクロバスもトヨタのそれであった。第７はレイキャビーク市街地の拡大で，距離で東や南に３割ほど伸び，前の漁村に高層アパートが建ち並んで，その間を高速道路が走っていた。暖房用熱水タンクも容量が約３倍にふえ，その利用の著しい発展を示していた。これらは首都人口がこの１０年に１０.８万から１２.２万にふえたためである。

談話会当日は上述の変化のほか，始めて行った噴火後１年半でなお赤い熔岩の見えるウエストマンナエイヤル島，建国1,０００年に縁の深いシンクベトリルの野外国会跡，直接手に触れ得たミールダルス氷河，北から射す最夜中の太陽などもスライドで紹介した。（1975.1.18）